元気な高齢者

9月は、敬老の日を中心に高齢者のための催しが各地でありましたが、町でも敬老会を開催いたしました。私も9月の末に、町内で本年88歳を迎えた方々96名と100歳の方6名を訪問しました。

お伺いした方々は、施設や病院の方が2～3名居りましたが、お会いした方はいずれもお元気で、庭の草取りや畑仕事をしていたり、自動車の運転なども自分でハンドルを握っているとか、「まだ仕事現役です」とおっしゃる方等、こちらもそのパワーを頂いてきました。

高齢者の生活タイプも大別して、2通りあるのかなとも思いました。大家庭4世代生活の中で、孫や曾孫と一緒に暮らし、若い人たちの刺激を受けながら、若さを保っていく暮らし方と、自分の生活は、自分で行い、炊事、洗濯、針仕事等、日常の身のまわりは自分が取り仕切っていくタイプ、いずれもその人の考え方や、今までの生き方、生活のリズム等によって自然に成り立っていくのではないかと思います。

昭和51年の旧常北町報9月号には、町内の88歳の方14名、最高齢者は96歳とあります。本年は常北地区の88歳の方45名、最高齢者は104歳であります。地域の30年間を振り返ってみても長寿高齢への歩みが数字の上でもみられます。

高齢者の方々が、なお一層元気で長寿を保たれますことをご祈念申しあげる次第です。

文芸しろさと

俳句

猪垣の上のいびつな空であり　飯田　勇一
群れて飛ぶ番の蜻蛉空高し　山崎　正行
山頭火の終焉の国秋澄めり　今瀬　多代美
麓より声の明るく紅葉狩　いそべ　きよ
野地菊や腐蝕の見える烏帽子岩　高橋　芦江
郷に来て庭散策す紅葉の木　飯村　愛子
京菓子の朱色の小箱初紅葉　鯉渕　寿美恵
里山の川の底まで秋日射す　阿久津　あい子
夜顔咲き吹き出すごとく香るかな　田所　厚子
川風に重き稲穂の勢揃ひ　飯村　昭子
長き夜足長々と檜風呂　和田　範子
母逝きて秘密の場所の茸山　仲田　まちろ
本閉じて大きくなりし虫時雨　森　静江
三日目の晴天茸飯届く　竹内　幸子
鰯雲命終の句は「山椒魚」　瀬谷　博子
山裾にリンドウの花背伸びして　阿久津　はつみ
霧深きモズ鳴く野良に蕎麦の花　田口　勝元
もつれ合う花から花へと黒き蝶　仲田　こう
秋空に金木犀の香りくる　市川　義子

短歌

夫急死のせつなき思ひに始めし短歌は老へたる今の心を支ふ　佐川　あや
良き意味の敵と味方に分けられてスポーツ競ふ「ふれあい広場」に　杉山　みちこ
各々の先祖のみ霊安かれと墓守る息等の出逢いで賑わふ　宮本　ふみ江
子守唄聴かせし日びも遠くなり孫らの成長の速きに驚く　所　美恵子
はるかなる宇宙の果てより来たまふか「山ぼうしの花」は白く天向く　青柳　京子
女孫の弾く「ドナウ河のさざ波」の音は冴えて青春の想ひ出流る　山形　式妙
真夏の陽照る国道は人気なくただ自動車のみ生き物のごとし　藤原　千代
白つめ草のレイを女孫と編みている初夏の風渡りゆく野に　渡辺　千紗子
わらべうたが今子育てにブームとふわが幼日の遠く甦り来　秋山　愛子
幼の日登り遊びし鞍掛の山変られて墓所が広がる　大森　久子
甲子園は自分を成長させてくれた大きな舞台と声を震わす　高堀　よしの
紅葉の眩く映る中禅寺湖の遊覧船上景色楽しむ　岩下　通子
宵待ちて演奏会にふけりいる秋の虫達声よく揃う　富田　欽子
今年こそ今年こそはと作る田に日照不足で稲穂短し　卜部　まさ子
飛びたたんばかりに咲きし鷺草のいとしき姿日毎眺むる　阿良山　ウメノ
晩秋の虫の音絶えてそこはかと冬の迫るを間近に感ず　岩下　美知野
プレーオフ剛腕松坂素晴らしき見事完封リベンジ果たす　山口　栄
照り曇る一日に祈るごと乾せる陸稲かそかに乾きゆくらし　薄井　ひろ
うす暗き林道に入れば夏の風ほほ渡りゆきぬしばし癒さる　枝不　美
音たててめくりたる頁にひとすぢの髪のこぼれて秋ふかみゆく　片見　和枝
荒々と岩礁を洗ひ砕け散る白波の上「かもめ」飛び交ふ　川上　千代子
遺骨なき兄の墓石に花を供え祈れる孫等に戦争無き世をと　島　愛子
畳半帖もあらむチラシを拡げ見るメインの太字鮮烈なりき　多田　志保子
日ごと訪う夫の病室しずかなり男性二人の患者にあれば　坪井　きよ子
木陰にて汗を拭きつつ手作りの紫蘇ジュース飲めば微風通り過ぐ　萩谷　登喜子
窓・窓・窓を吹きぬく秋風肌に感じ夜具の用意の季の来たれるや　和知　美智子
吾妻嶺の南のなだり一面を七カマドの実が朱に染めいたり　冨田　佐智子

川柳

広報紙配って逢えば皆元気　山本　隆荘
茎芋と子宝恵む八頭　青木　新三郎